

# 対人援助学会第 15 回年次大会をふり返る

迫 共 (比治山大学)

この 11 月 11 日、12 日に対人援助学会、広島大会を無事開催することができました。南は沖縄、北は北海道まで、さらにフランスからも計 63 名の方々が学会のために広島、比治山大学にお集まり下さり、盛会にて 2 日間の日程を終えました。14 件の学会発表、企画シンポジウム 2 件、企画ワークショップ 2 件、オプションルツアー等、多彩な内容の学会を大きなトラブルなく開催できました。広島大会のために尽力くださったスタッフ各位や千葉さん、大谷さん、川原さん達、学会理事、職員の皆様のご協力のおかげです。大会実行委員を代表して厚く御礼申し上げます。以下、全体をふり返りながら気づいたこと等を書いていきたいと思えます（会場の都合上、報告者が内容について十分に確認できなかったものがございます。当日資料などから適宜補って説明していますが、理解不足などがありましたら大変申し訳ありませんが、ご指摘ください）。

初日 11 月 11 日はオプションルツアー「被爆樹木を巡るフィールドワーク」からスタートしました。広島市には原子爆弾の惨禍に耐え、現在も命をつなぐ被爆樹木が約 160 本存在します。フィールドワークでは広島城周辺をめぐり、「75 年間は草木も生えぬ」と言われたかつての光景を思いめぐらせる時間を持ちました。

V・E・フランクは強制収容所で数日のうちに訪れる死を前にした女性が、窓から見えるマロニエの木を友達と呼び、木と話せると言い出すエピソードを残しています。

せん妄による幻覚を疑ったフランクは「木もなにか言うのですか？」と女性に尋ねると彼女はこう答えたそうです。「木はこう言いました。私はここにいる。私はここにいるよ、私は命だ、永遠の命だと…」。

洋の東西を問わず、戦争がもたらす限界状況の淵において人々の心に響いたのが樹木の生命力であったことは興味深いものがあります。私たちが自身の無力さに絶望しきったとき、土着の生命の繋がりが回復の力を発現するのかもしれない。

開会式に続く記念講演、「私が被爆者から受け取ったもの—それぞれの『物語』を通して—」では、特定非営利活動法人理事長の渡部朋子さんから、広島における様々な被爆者の人生経験と苦悩、そしてそれを乗り越えていった物語を聞くことができました。1945 年 8 月 6 日、一瞬の原子爆弾の破壊力が広島の人たちの人生全てを狂わせてしまいました。生き残った人はサバイバーズギルトに苦しみ、戦後においても被爆者への差別に苦しみ、自身の経験を言葉にすることができなかった、外国人から聞かれて初めて自分の経験を口にできた…。このような被爆者の語りが紹介されました。

「被ばく体験の継承」「核なき世界の実現と、新しい国際秩序を創る」「平和で持続可能な世界への転換を促す活動」「平和文化・平和教育の普及」「平和の担い手を育てる」

の5つのミッションを今日の広島課題としてとらえ、国や文化を越えた活動をしていることの報告を聞くことができました。

渡部さんの学生時代のお話に哲学者ジンメルの「橋」への言及がありました。分断を繋ぐものの表象が橋です。広島は大井川の下流の街であり、市民生活の中に橋の存在があります。多様性と持続可能性をテーマとする本大会にふさわしいテーマだったように思います。

理事会企画I「つながりと対話の場づくり ～ハチドリ舎の実践～」では、原爆ドーム近くでソーシャルブックカフェ・ハチドリ舎を営む安彦恵里香さん、カウンセラーの梶原慶さん（オトナコドモシステムズ）、本大会共同代表で広島市児童相談所の岡崎正明さんによるシンポジウムが行われました。

ハチドリ舎では「真面目な話をしても引かれない、できるだけ手作りの場所」を理念として、「被爆者と語る」「ジェンダー」「哲学者との対話」といった硬派な話題から、「NVC（非暴力コミュニケーション）」「セクマイBAR」「弁護士BAR」「坊主BAR」などの相談系(?)イベント、「マサイの暮らし」「太極拳」などちょっと興味を持った人が来てもよさそうなものまで多彩なイベントが、連日行われています。ハチドリ舎の企画内容や、それらで扱われる社会課題について紹介され、参加者が気になっていることから企画を考えてみる時間が設けられました。

企画ワークショップ1「多様で持続可能な対人援助に必要な『知』について」では退院支援研究会の本間毅さん、学会副理事長の村本邦子さん、理事長中村正さんの鼎談が行われました。

前回大会の実行委員長であった本間さんの発表では、第14回大会の「新潟水俣病と私たち」からの継承と発展、今大会のテーマ「対人援助の多様性と持続可能性」が示す課題について、話題提供が行われました。

広島原爆の投下後、自らも被爆した医療者らは資材や医薬品が底をつく中で患者に治療を行い、後に原爆症とされる一定の病態に気づいていましたが、GHQが初動調査を秘匿したことから十分な対応ができないまま時間を浪費し、多くの命が奪われました。合理的なエビデンスに基づく実践こそが正しいとする科学的知性や理性が、ときに人を狂信に導くということが三島由紀夫の言葉を通して紹介されました。

同様のことは戦後日本においても指摘できます。基本懇答申（1980）にみられる「被爆地の指定は…科学的根拠に基づいて合理的に行わなければならない」との文言は、科学や合理性が被害者の差別や分断を招くものとなりました。被爆者への医療から学ぶべきものとして、援助者の「経験と知識」が「専門家暴力」になる可能性に配慮すること、「対人援助に‘物象化’は禁物」という指摘がありました。

村本さん、中村さんからは、学会の発足からこれまでの道筋がふり返られ、「研究だけに留まらない、実践だけでも留まらない」という本学会の理念に立ち返りながら、これまでの学会エピソード、そして次年度以降の展開への期待が語られました。個人的には村本

さんの語られた西洋中心の科学志向から、土着心理学へという言葉、中村さんの語られた大橋力氏（芸能山城組組頭）の熱帯雨林の音環境の話などが印象に残っています。

2日目の11月12日は、朝からポスターセッションの質疑応答と、「誰でも調子に乗れる『書道対話』ミニ体験会」が行われました。ポスター会場の教室では心理支援や教育、保育、看護、工学、セクシュアリティ等、対人援助に関わる14件の発表があり、会場教室の中央では「書道対話」が行われるという、緊張感だけでなく賑やかで楽しい場が展開されました。そのような中、大会共同代表の私が、終了時間を1時間間違えてアナウンスしてしまうという失態をやらしました。大変失礼いたしました。

理事会企画Ⅱ「保育関係者による当事者研究 —保育現場の『しんどさ』等をめぐって—」では、大和大学白鳳短期大学の西川友理さん、かわさき保育園の南部紀子さん、北治山大学の迫共がシンポジウムを行いました。

迫から当事者研究について、西川さんから「支援の当事者研究会 わやの湯」「子どもと関わる大人などの会 こどなど」の実践について、また保育者による当事者研究の必要性とその困難さについての説明を行った後、保育園長である南部さんから、保育園の子どもたちとのやりとりに、日々、当事者研究的なアプローチを取り入れている実践例を報告してもらいました。

子ども同士の思いのすれ違いや上手くいかなかったことを図解してみせると納得する様子や、園長がかけた言葉の選択で子どもを傷つけたことを謝ると、子どもが「いいよー」と許してくれたエピソード、おもしろしをする子への対応に悩む保育士らに自身のおもしろエピソードを回想させると、近視眼的になり行き詰っていた状態から距離をとることができ、「問題は解決していないが共存できる」ようになったというエピソード等が紹介されました。

保育と当事者研究をめぐる実践研究は、まだ萌芽的な段階ですが、子ども達とのやりとりにも、保育カンファレンスや保護者対応にも応用できる余地があると考えています。

その後、お昼休憩（理事会）をはさみ、企画ワークショップⅡ「心理支援ツールを活用する対人援助アプローチ —『困ってますゲーム』と『行動の信号機』の体験会—」が行われました。

大阪市中央こども相談センターの中村泰子さんが企画・発表者となり、ご自身が開発されたゲームの説明と、参加者が実践する時間が取られました。

児童虐待対応における家族の再統合支援に際して、当事者自身の強みを生かしてエンパワーする関係構築のための心理支援ツールです。

2020年作成の「行動の信号機」は、規範意識や善悪の判断について、子どもと一緒に考えるためのツールとしてワークブック版からはじまったもので、支援対象の理解力や集合力に対応するためにカード版へと工夫されてきたものです。

2021年作成の「困ってますゲーム」は、「行動の信号機」カード版をもとに、「話す人」「きく人」の役割となって「相談する」「話をきく」のやりとりに特化し、親子の関係改

善を目指していくゲームです。親子やグループでの取組が推奨されています。

ワークショップでは参加者が4人程度のグループとなって、対人援助アプローチのファシリテーター体験をしました。ゲームの実施のあと、参加者から感想の共有と意見交換が行われました。児童相談所の職員や心理支援の専門家をはじめ、様々な専門性をもつ学会員が熱心に参加していました。

2日間の日程の最後に全体会が行われました。学会運営を手伝ってくれた学生スタッフに学会理事長から感謝の言葉が述べられ、学生も緊張しながら参加して感じたことを返していました。広島大会の報告だけでなく、1年間の論文投稿数の報告会計報告、次回大会について等、様々な運営事項が共有されました。

2日間の大会日程のために広島スタッフは1年間の準備期間をもち、幾度となくzoomミーティングを行いました。広島在住のスタッフは5名（途中まで4名）。学会大会の運営経験のあるスタッフはおらず、私も広島に赴任して2年目という状態、比治山大学も事務方によると「学会大会をやったことがない」という中での運営でした。手探りどころか、体当たりで運営にこぎつけた部分もあります。zoomミーティングで助言を下さった千葉さん、川原さんには助けられました。千葉さんと大谷さんには、前日入りして頂いて会場設営と団先生の掛け軸の設置（ご本人がまさかの体調不良。とても残念でした！）にご尽力頂き、大変助けられました。

今年2月、現地の下見に千葉さんがこられた際、事前に連絡していたのに大学の会場館の鍵が開いておらず、しばらく中に入れなかったという事件が起きました。この経験があったので、大会1週間前と前日に、事務方と守衛に念押し連絡をしました。

大会運営スタッフにも体調不良者が続出するなか、前日にも当日にも比治山大学の学生が設営と運営を手伝ってくれました。また当日においては学会参加者の皆さんが協力的に動いてくださったので、大変スムーズに進めることができました。手作りの温かみのある学会大会ができ、まるで「大人の学園祭」のような高揚感を味わえました。次回大会は大阪・京都でとのことですが、未開催の地域の皆様、次々回以降の開催を試みるのはいかがでしょうか？ 不思議な人脈が広がり、貴重な体験ができますよ（と唆しておきます）。